地学雑誌 97-2 (1988)

International Symposium on Geodynamics of Deep Sea Trenches of the Pacific 出席報告

岡田博有* 志岐常正**

「太平洋の海溝ジオダイナミクス」に関する国際シンポジウムが，ソ連科学アカデミー・国際“リソスフェア”研究計画ソ連国内委員会などの主催で1987年6月29日から7月5日まで南サハリン，ユージノサハリンスク市（豊原）の共産党州委員会政治教育局の講堂で開催された。参加者はソ連からの約150名のほか5か国25名であった。ソ連以外の参加者の内訳は，日本9名，アメリカ12名，イタリー2名，ハンガリー1名，西ドイツ1名である。日本からは青木 斌（東海大），木村学（香川大），三宅康幸（島根大），茂木清夫（東大地震研），根元謙次（東海大），新妻信明（静岡大），西村敬一・志岐常正（京都大），岡田博有（静岡大）が出席した。アメリカからは T. Hilde (Texas A & M Univ.), J. Krason (Geoexplorer International) のほか，U.S.G.S. 関係者を中心とする若手研究者が多かった。

シンポジウムは，組織委員長 K. F. Sergeyev（海洋地質学地球物理学研究所長）らの歓迎挨拶に始まり，下記の5セッションに分けて4日間行われた。

1. 海溝と島弧の構造とジオダイナミクス
2. 付加テクトニクスと背弧拡大
3. 火山活動および火成岩の地球化学
4. 海溝形成モデル
5. 地震と津波

各セッションは同一会場で行われたので便利であった。講演はロシア語または英語で行われ，常に同時通訳がついた。講演では70編の論文が読まれ，ポスターセッションは37件を数えた。各講演に対する討論は極めて活発で，プログラムも途中から大幅に変えざるをえないほどであった。特に興味深かったことは，ソ連側研究者の講演の多くはプレートテクトニクスを認めないか，仮説とみなす立場からのものであったが，討論ではプレートテクトニクスを前提としたような議論が多かったことである。連日の講演は朝9時から午後7時過ぎまで行われ，かなりハードなスケジュールであった。また，講演の合間には，カムチャッカの火山噴火の観測・調査の模様を写したドキュメントフィルムが上映された。迫力十分な映画であった。

7月3-4日は地質巡検が行われた。3日はユージノサハリンスクからホルムスク（真岡）市までのルートで第三系を観察した。4日はユージノサハリンスクから北東のレスノイエ村までで，神居古潭変成岩の北方延長に当たる結晶片岩を観た後，清流の岸辺でバーベキュウパーティをひらいて懇親を深め合った。これらの巡検では，北海道との関連からの地質見学ができるものと，大いに期待して参加した。事実，案内者もこのような観点から説明していたが，説明資料の配布は全くなく，観察地点も断片的なのが惜しまれた。

会期中，われわれ外国人に対するソ連側の配慮は大変きめ細かいものであった。宿舎はサハリンホテルが当てられ，待偶もよかった。毎日，講演終了後は博物館，サナトリウム，サウナ，デパート，ピオニール・サマーキャンプなどの市内見物のプログラムが用意された。また，最終日は市郊外にある海洋地質学地球物理学研究所を訪問し，Sergeyev 所長，H. Gnibidenko 博士らと交流を深めることができた。

また，この会期前後2日ずつ航空機便の関係でハバロフスクに滞在したが，この間も構造地質学

* 九州大学理学部 Faculty of Science, Kyushu University
** 京都大学理学部 Faculty of Science, Kyoto University

地球物理学研究所，学術・文化交流委員会極東支部，その他市内要所の訪問・見学日程が組まれるなど，ここでも配慮をいただいた。とくに，構造地質学地球物理学研究所では所長のアカデミシャン I. A. Kosuigin 教授と学術交流の諸問題について話し合うことができた。

今回のシンポジウムでは，海溝問題に関するソ連側の最近の研究成果と研究動向に接することができたのは大きい収穫であった。海溝沈み込み帯についてのソ連側主催者の考え方や問題意識は，今シンポジウムのシンボルマークに描かれた巨大な疑問符号化した沈み込み帯に象徴されているように思う。一方，日仏 KAIKO 計画の成果に対するソ連側の関心は極めて高く，われわれの滞在中地元新聞にもその概要が紹介されるほどであった。深海潜水艇による海洋調査にソ連も強い意欲を示しており，既に 2000m 級潜水艇によるオホーツク海東部の千島寄りの調査でかなりの成果を挙げているようである。ソ連も現在 6000m 級潜水艇を持とうとしているようだ。

今シンポジウム閉会式は組織副委員長 L. A. Savostin（海洋研究所）の司会のもとで行われ，本標題の国際シンポジウムを定期的に（例えば2年毎）開催したいという熱い要望が採択された。しかし，次のシンポジウムを何時，何処で開くか議論されたが結論はえられなかった。日ソを中心とするこの種の国際会議を日本でも開くべきであると思うが，日本側の障害が早急に取り除かれることを切に願っている。今回のシンポジウムでは，われわれ全員の滞在費をソ連科学アカデミーが負担してくれた。ソ連側の配慮に感謝するとともに，今シンポジウムの成功に祝意を表したい。